

## 論文要約

論文題目 名詞句を構成する「の」の研究 —準体助詞「の」の文法性の再規定—

申請者 山村 仁朗

### 論文要約

本論文は形式名詞としての働きをもつが名詞としての対象指標性をもたないという文法的特徴を有する名詞句を構成する「の」の文法性を明らかにすることを目的として、五つの章を立てて論じた。

第一章では「の」が構成する名詞句が名詞句として成立することの主要契機を巡っての研究史を概観した。研究史は主要契機を「の」にそれを求めるか、「の」に先行する連体語句にそれを求めるかに大別できる。「の」に名詞句であることの主要契機を求める場合、「の」を「もの」「こと」などと同様、範疇を規定するという働きをもつ形式名詞と位置づけることを意味するが、「の」は形式名詞一般が一方でもつ名詞としての性格である対象指標性をもたない。にもかかわらず、なぜ「の」は形式名詞性をもつのかということを解明することが必要であろう。一方、連体語句に主要契機を見る場合とは〔連体語句＋の〕の形式が古代語の活用語連体形の用法である準体言用法（雪の降りたるは言ふべきにもあらず。）の後裔であるとするものである。この場合、「の」はこの形式のなかでどのような働きをしているのかということ、またなぜこの後裔の形式として「の」が用いられるに至ったかということ解明しなければならない。「の」の文法性を明らかにするためには、以上の問題を解決しなければならないことを指摘した。

それを承けて、第二章では、形式名詞の文法性が近代文法学の中でどのように立論されてきたかを詳細に辿った。形式名詞と準体助詞を体言としての独立性を有しているか否かによって区別されたこと（橋本進吉）、〈形式〉という概念が物事の本質を体現化することを表す「形相」という意味であること（松下大三郎）、実質名詞と形式名詞の差異をまず概念の差に求めようとしたこと（松下、橋本）、その後形式名詞の性質が機能面から捉えられる方向へと展開し（佐久間鼎）、先行する連体語句の範疇を規定する働きをもつということに至ったこと（井手至）、さらにその働きが名詞の範疇の実質に応じた作用の差に基づくとしたこと（内田賢徳）、これら一連の形式名詞研究を承けて、「の」を範疇としての実質を持たず、範疇を規定する働きだけをもつ、形式名詞の形相を最も純粹に表すものであると位置づけた。またその語誌について検討し、古代日本語において連体助詞であった「の」（平群の山（記歌謡））が、用言終止形的位置を連体形が奪うという現象により衰退した古代語の連体句準体言の新たな形式として、上接する語句に連体句の資格を形式的に与える働き

をするに至ったものであることを明らかにした。そして、「の」の形式名詞性ならびに形式名詞としての異質性（非名詞性）とはまさにこの「の」の文法性のことであり、その「の」の形式名詞性を改めて〈準体助詞〉と規定した。

以上の二つの章が本論文において総論的であるのに対し、残りの三章は各論的な位置づけをなす。第三章では、現代語において「の」と「こと」とはどのような場合に置き換え可能であり、どういう場合に可能でないかということ、すなわち両者の差異について検討し、「こと」が能力や行為など具体的な範疇を表す場合には「の」への置き換えが可能でないこと、逆に「こと」が純粋なことがらを表す場合には「の」への置き換えが可能であることを指摘した。その結果は、第二章で述べた「の」が範疇としての実質を持たず、範疇を規定する働きだけをもつ、最も純粋な形式名詞であるということと見合っている。

第四章、第五章は準体助詞「の」の現代語におけるあらたな展開について論じた。第四章では「の」が「だ」を伴って文末に現れる「のだ」形式の表現性を取り上げた。「のだ」の文は活用語による終止形終止文、「だ」で終止する名詞述語文とは異なる「信憑」ということを強く表すという表現性を持ち、「のだ」はことがらを確実なこととして規定するという働きをもつ。その性格を成立期にあたる近世江戸語の資料である「浮世風呂」「浮世床」に遡って検討し、コト相当の名詞句を構成する「の」がことがらの確定性という方面で現実的な意味を獲得するために生じたものであることを指摘した。

続く第五章では「の」が「か」を伴った文末形式「のか」の表現性とその広がり現代語の実例に基づいて検討した。その用法は「か」の用法よりも広い在り方をもち、基本的に「のだ」の信憑の表明としてあることと共通した、信憑の疑問形式と言えるあり方である。「のか」の文に認められる感嘆、あざけり、詰問、納得、自責、自嘲といった種々のニュアンスは信憑ということの実際の諸形式と見ることができると述べた。文末にあやをつける表現形式「のだ」と「のか」は準体助詞「の」のことがらへの信憑を表すという現代語における新しい展開であると位置づけた。

以上の論証により、現代語において形式名詞として働く準体助詞「の」の文法性およびその展開の一端を明らかにした。